

平成30年度 えびの市教育研究論文

「ジョリーフォニックス」を取り入れた
英語学習の研究

～新文型や教科書本文及び家庭学習との関連を図った

フォニックス学習の実践を通して～

えびの市立飯野中学校

指導教諭 今西 智美

目 次

I	研究主題及び副題	1
II	主題設定の理由	
III	研究の目標	
IV	研究の仮説	
V	研究の内容	2
VI	研究の構想	
VII	研究の実際	
1	今年度の4月から6月初旬までの英語科の授業内容	3
2	「ジョリーフォニックス」の実践	
(1)	「ジョリーフォニックス基本の42文字（綴り）の音」の授業の流れ	
(2)	各活動の実践内容	
(3)	「ジョリーフォニックス基本の42文字（綴り）の音」の指導の流れ に加えた実践	6
(4)	同音異綴りの学習	
3	ジョリーフォニックスの学習と並行して行った、新文型や教科書本文内容を 意識した学習	7
(1)	アクションカード（教科書付録）を使用した活動	
(2)	教科書で扱われる内容を意識した話す活動	8
4	負荷を感じさせることなく書く力の定着を図ることを目指した家庭学習課題	
(1)	課題の内容とその目的	
5	「ジョリーフォニックス」の学習に関するアンケートの実施と結果	9
(1)	今年度7月に実施した「ジョリーフォニックス」の各活動に関する アンケート結果	
(2)	今年度12月に実施した「ジョリーフォニックス」の学習に関する アンケート結果	
VII	研究の成果と課題	
1	成果	
2	課題	10

I 研究主題

「ジョリーフォニックス」を取り入れた英語学習の研究
～新文型や教科書本文及び家庭学習との関連を図った
フォニックス学習の実践を通して～

II 主題設定の理由

「フォニックス」とは発音と文字の関係性を学ぶ音声学習法である。フォニックスを学ぶことで読み書きが容易になるという自分自身の経験からも、これまでその法則のいくつかは教えていた。2016年の12月、私は「シンセティック・フォニックス」という言葉に出会った。その教材の1つが「ジョリーフォニックス」である。「アルファベット順(a→z)でなく、読める単語が増えやすい順(s→a→t→i…)に教える。」「大文字と小文字を同時にではなく、小文字から教える。」「最初は文字の音(「s」の音は「ス」)だけを教えて名前(「s」の名前は「エス」)は後で教える。」というシンセティック・フォニックスの特徴に加え、多感覚を用いる「ジョリーフォニックス」は非常に合理的で、文字を学習し始める学習者や英語を苦手とする生徒の助けになると確信して昨年度から実践してきた。昨年度は4月から6月初めにかけて1年生と3年生で実践した。昨年度の第3学年生徒へのアンケート結果を見ると、90%以上の生徒が「ジョリーフォニックス」の学習が英語学習の役に立ったと答えており、英語学習へ向かう姿勢が意欲的になった生徒もいることから、その有用性を実感した。その一方で、1年生の実践においては課題も見えた。年度当初に「ジョリーフォニックス」の学習を行うことで、教科書を扱い始める時期は必然的に遅くなり、フォニックスの学習後は進度を気にしながら学習を進めることになった。そのことが学習内容の定着に影響を及ぼした可能性がないとは言えない。昨年度は、1年生に対して私がフォニックスの学習のみを行い、家庭学習を含めたその他の部分は当該学年の別の教科担任が行った。十分な連携を図ることができず、フォニックス学習と教科書内容及び家庭学習との関連を十分に図ることができなかつたことが反省の一つである。

今年度は1年生の担当となり、昨年度の課題を意識してフォニックス学習に取り組める状況となった。昨年度の3年生へのアンケート結果や、彼らの英語学習への取組が意欲的になったことから、年度当初に「ジョリーフォニックス」を実践することへの迷いは一切なかった。そこで今年度は、「『ジョリーフォニックス』の実践」と並行して、「新文型や教科書本文の学習にスムーズに移行できるような学習」及び「負荷を感じることなく書く力の定着を図ることができる家庭学習の課題」を意図的に実施することで、フォニックス学習がその後の英語学習にも有用なものとなり、英語学習への意欲及び学力の向上にもつながると考え、本主題を設定した。

III 研究の目標

「『ジョリーフォニックス』の実践」と並行して、「新文型や教科書本文の学習にスムーズに移行できるような学習」及び「負荷を感じさせることなく書く力の定着を図ることができる家庭学習の課題」を意図的に実施し、生徒の英語学習への意欲を高め英語の学力向上につなげる。

IV 研究の仮説

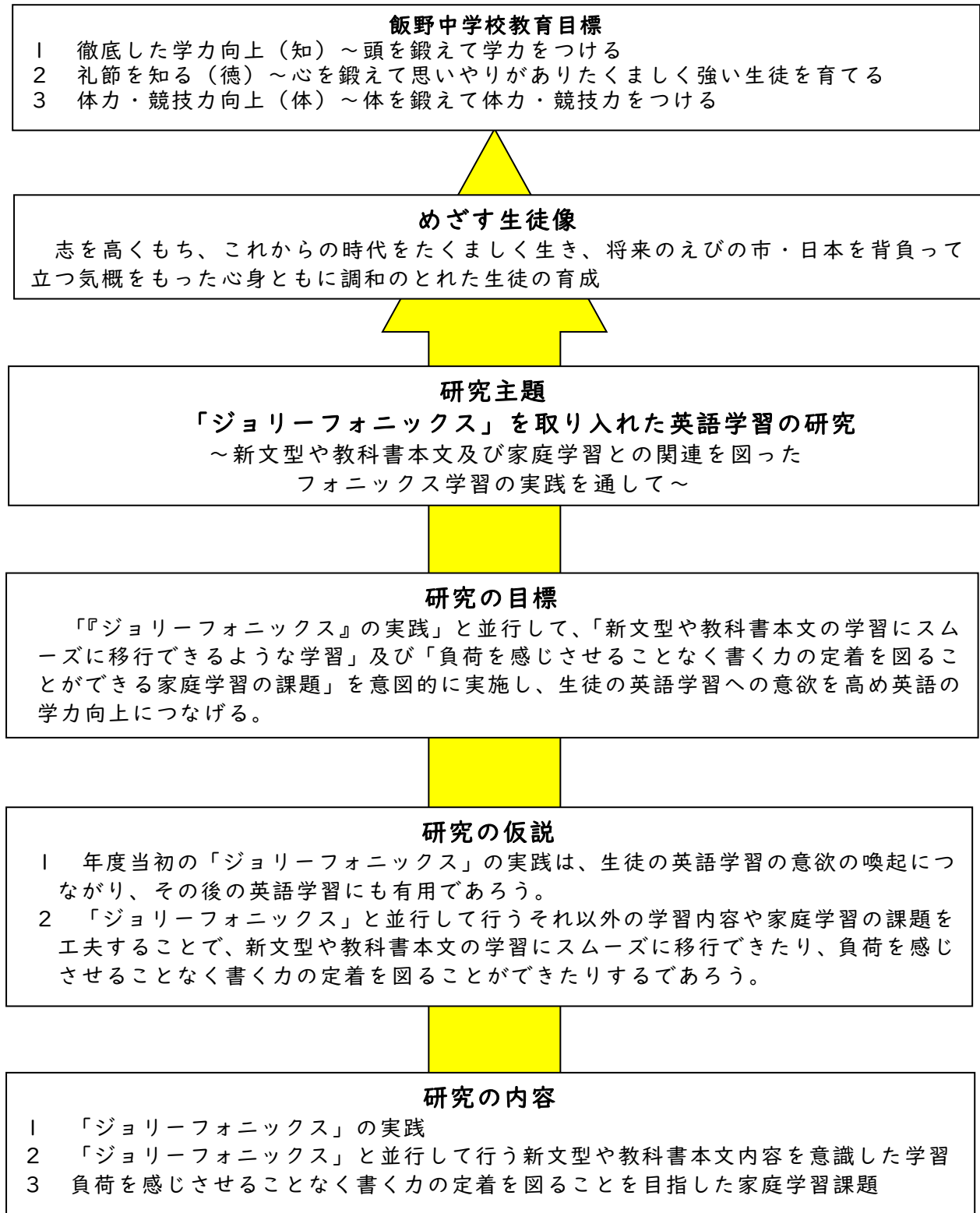
- 1 年度当初の「ジョリーフォニックス」の実践は、生徒の英語学習の意欲の喚起につながり、その後の英語学習にも有用であろう。
- 2 「ジョリーフォニックス」と並行して行うそれ以外の学習内容や家庭学習の課題を工夫

することで、新文型や教科書本文の学習にスムーズに移行できたり、負荷を感じさせることなく書く力の定着を図ることができたりするであろう。

V 研究の内容

- 1 「ジョリーフォニックス」の実践
- 2 新文型や教科書本文内容を意識した学習
- 3 負荷を感じさせることなく書く力の定着を図ることを目指した家庭学習課題

VI 研究の構想



VII 研究の実際

1 今年度の4月から6月初旬までの英語科の授業内容

4月から6月までは教科書を使用せずに、音の学習を中心に以下の内容で授業を行った。

月	「ジョリーフォニックス」の内容	「ジョリーフォニックス」以外の内容
4月 から 5月 下旬	○基本の42音（約16時間）	○アクションカード ○英語表現科で学習した話す活動（「友達と質問し合おう」「友達と好きなものを尋ね合おう」）
5月 から 6月 初旬	○同音異綴り（約7時間）	○アクションカード ○英語表現科で学習した話す活動（「毎日や週末することを尋ねあおう」「自分のことを紹介しよう」） ※同音異綴り後 ○文を書くときのルール ○大文字と文字の名前

2 「ジョリーフォニックス」の実践

(1) 「ジョリーフォニックス基本の42文字（綴り）の音」の指導の流れ

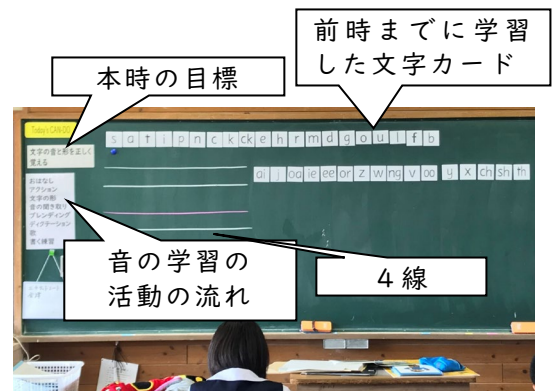
- ① 音の復習…前回までに学習した文字の復習をする。
- ② お話…お話を使って学習する文字の音を導入する。
- ③ アクション…「お話」の中で導入した音を、教師と生徒でアクションをつけながら練習する。
- ④ 文字の確認…その日に学習する音の文字（綴り）を確認する。
- ⑤ 音の聞き取り…教師が発音する単語の中に学習中の音があるかを聞き分ける。
- ⑥ ブレンディング…一つ一つの音を組み合わせて単語の発音をする。
- ⑦ ディクテーション…教師が発音する単語を聞いて文字にする。
- ⑧ 歌…その日に学習した音の歌を2回流す。1度目は歌のどこにその音が出てくるかを確認し、2度目はアクションをつけながら歌う。

(2) 各活動の実践内容

日本語版ティーチャーズブック「はじめてのジョリーフォニックスーティーチャーズブックー」（ジョリーラーニング社編著 山下桂世子監訳）のレッスンマニュアルに基づいて授業を実践した。

① 音の復習

時間を有効に使うため、授業開始時には右の写真のような黒板の準備を済ませた。文字カードは学習した順に教師が貼っていたが、学習になれた頃には、生徒が積極的に貼るのを手伝ってくれた。黒板に貼られた文字カードを見て、全員でアクションを付けながら文字の音を発音し復習させた。教師は生徒と一緒に発音したり、生徒の発音を聞いて正しく発音しているかを確認したり、発音するときの口の形やポイントを言ったり、日によって支援を変えた。



② お話

全員の生徒にイラストが見えるように、拡大版の絵本であるビッグブックを使用した。学習のページを見せながら日本語で物語を話した。物語の中に、学習する文字の音が自然に出てくるようになっている。文字の音と同時にアクションも導入した。絵本のイラストや物語の内容から、ペット、大掃除の時期、九九、運動会などイギリスの文化について知ることができ、生徒は、興味深くイラストを見たり教師の話す物語を聞いたりしていた。

③ アクション

中学生にもなると恥ずかしくてアクションをしたがらない生徒もいる。「ジョリーフォニックス」の特徴の一つは「多感覚を用いる」ことである。「視覚、聴覚、触覚、運動感覚、いろんな感覚を使って学習していることを身に付けてほしい。」という話を生徒にして、アクションをしたがらない生徒にも、必ず1回はするようにお願いした。生徒アンケートから、アクションを付けて覚えることは、文字を思い出すときや「b」と「d」などの似た形を区別するときに役立っていることが分かった。

④ 文字の確認

学習する音の文字（綴り）を教師が黒板の4線に書き、書き順、形、文字の高さなどを確認した。これまで英語学習を始めたばかりの生徒たちにアルファベットを書く練習をさせる際に、「e」や「s」を2線と3線の間にきれいに書くのに苦勞する生徒を見てきた。そこで4線は、2線と3線の間の幅を他の幅よりも広くした。そうすることで、最初からきれいに文字を書ける生徒が多かった。また、文字を見てその文字の名前を言う生徒がいた（「s」の音は「ス」、名前は「エス」）ときは、文字には音と名前があり、ここでは音だけを学習することを補足した。黒板で文字を提示した後は、教師と生徒で音を言いながら宙に文字を書いて、書き順や形の確認をした。

⑤ 音の聞き取り

教師の発音する単語を聞いて、その中に学習中の音が聞こえた生徒は手を挙げる形で行った。単語は、普通のスピードで2回、一つ一つの音で区切って指を出しながら2回、単語普通のスピードで1回の順に発音した。その後、どこに聞こえたかを尋ねると、生徒は「最初」「途中」「最後」と聞こえた場所を答えた。学習中の音が含まれていないものや学習中の単語と似た音を含むものを意図的に発音し、集中して聞かせるようにした。「r」と「l」や「a」と「u」などの似た音を聞き分けるために、教師の口の形に注目して聞き取りに取り組む生徒が増えた。それは生徒自身の正しい発音にもつながっている。

⑥ ブレンディング

これまで学習した文字の音だけで構成される単語を黒板に提示し、その下に「音ボタン」と呼ぶマグネットを置いた。「教師が音ボタンを押したら1度だけその音を発する」というルールで、生徒全員で音を出していった。最初はボタンを押すスピードはゆっくりで1音ずつばらばらの音を、だんだんとボタンを押すスピードを速くし、最後はつなげて1つの単語の発音にした。最初の頃は教師が黒板に単語を書いて、音ボタンとしてマグネットを置いた。教師が書くのと同時に、ぼそぼそと音を出す生徒もいたのに感激したが、時間短縮のために、途中からはブレンディングで使用する単語をカードに書き、裏面にマグネットを貼ったものを黒板に貼って提示した。子音は水色、母音はピンクで少し大きいマグネットを使用した。生徒から質問が出ることもなかったため、子音と母音についての説明はしなかった。ダイグラフ（2文字で1つの音になる文字）には線を引いて分かりやすくした。生徒アンケートには、身の回りの英語を読むときにこの技能が役立っているとの回答が複数あった。



⑦ ディクテーション



【写真1】



【写真2】



【写真3】

本来であれば、発音される単語を書く作業であるが、文字を書く練習をしていないため、書かせることはできないという判断から、アルファベットカードを並べて単語を作る形で行うことにした。ペアの活動にすると、得意な生徒だけの活動になる可能性があることや個人の理解度を把握できるという理由から、個人の活動とした。教材として、個人にホワイトボードと日本語版ティーチャーズブック資料編のフラッシュカードを縮小コピーしてラミネートしたもの（写真1）を準備した。カードの表の右上にシールを貼り、上下の混乱がないようにした。裏面にはラインを引きマグネットを貼った。基本の42音は、7つのグループで構成されている。そこで、第1グループは紫、第2グループは黄色、第3グループは緑、第4グループはピンク、第5グループは白、第6グループは黒、第7グループは青とグループごとに色分けをし、カードは同じ色の輪ゴムで止めた（写真2）。授業の開始前に、生徒はこれまで学習したカードを自分の机やホワイトボードに並べておくように指示をした（写真3）。

教師は、単語を普通のスピードで2回、一つ一つの音で区切って指を出しながら2回、一つ一つの音で区切ってアクションをつけながら2回の順で発音した。生徒は

カードをホワイトボードに並べて単語を作り、できた時点で「Look at my board.」と言ってボードを教師に見せた。「Yes.」「No.」「Close.」「Good.」「Right.」「Wrong.」などと生徒の見せる単語をチェックし、全体的に間違いの多い部分はもう一度意識させるように発音したり、個人の間違えやすいところ（例：母音が単語に抜けている。「a」と「u」の区別が多い等）に気付いたら助言をしたりしながら、全員が正解するまで続けた。早くできた生徒は困っている友達を助けるように言ったが、答えそのものを教えるのではなくその人が答えを出せる手伝いをしてほしい旨を伝え、文字を思い出させるために発音をしたり、アクションを見せたり、物語の一部を言ったりと、生徒たちなりに一生懸命友達を助けようとしていた。その行為によって、できる生徒はさらに理解を深め文字と音の関係を定着させていったと思う。この活動を通して、見逃してしまいそうな生徒の個性や特徴にも気が付くことができた。間違いを恐れずにホワイトボードを見せる生徒、合っているという自信がもてるまでホワイトボードを見せない生徒、先に正解した友達のホワイトボードを見てから見せる生徒など、個人の理解の状況と同時に性格や個性の把握にもつながった。これはその後の個人やペアでの活動時、誰の所に支援に行くべきかに大きく役立った。生徒アンケートから、「徐々にできるのが早くなっていくのを感じることができて、これからも頑張っていけると思うようになった。」「ヒントを聞かずにできたときの喜びがあった。」「最後まで自分の力でさせてもらえるから力になった。」など、「分かる」「できる」と達成感を感じながら学習意欲を高めていくことにつながった活動でもあったことが印象的であった。

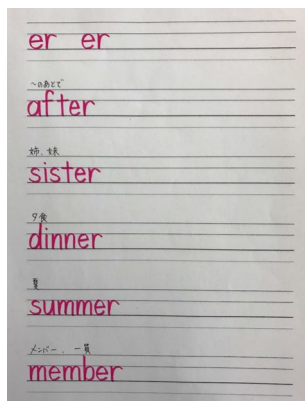
⑧ 歌

楽しく歌って盛り上がった学級とそうでない学級とに分かれた。アクションをせずに歌っている場合はもう1度流すこともあった。基本的に2度しか流さないために、どこにあるかよく分からなかったり歌えないまま終わってしまったりして、生徒アンケートからも役に立

つ活動だとは感じにくいようだった。しかし、「曲のリズムで覚えやすかった。」「歌の中に音があるから、歌いながら正しく発音できた。」という感想もあり、多感覚の指導の点からは外せない活動であると思う。

(3) 「ジョリーフォニックス基本の42文字（綴り）の音」の指導の流れに加えた実践

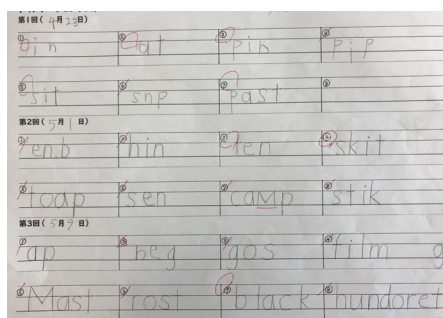
① 書きの練習



学習した文字を書く練習のために、学習した文字とその文字を含む5つの単語で構成された、左の写真のようなワークシートを作成した。取り上げる単語は、それまでに学習した法則で読んだり書いたりできる単語を、1年生から3年生の教科書から全てピックアップし、その中からより重要な単語、例えばアクションカードで口頭練習しているものや1年生の教科書に出てくる単語などを5つ選んだ。「丁寧に書くこと」と「単語と単語の間にフィンガースペース（指1本分のスペース）をとること」を徹底して、2回ずつ書くように指示した。ワークシートに取り組む時間は、最初は授業で確保したが、丁寧に書くこととフィンガースペース

をとることが生徒に定着した後は、授業内で行うには時間を要するため、基本的に家庭学習で行わせた。2回ずつ書くのは生徒に負担をかけないため、雑に書く生徒はいなかった。最初は丁寧に文字を書くために非常に時間がかかっていたが、徐々に丁寧さと同時にスピードも意識させた。普通のスピードで書けるようになった今でも、きれいな文字の生徒が多い。また、毎年どの学年にも文を書く際に単語と単語の間を開けずに指導を要する生徒がいるが、最初の段階でフィンガースペースを徹底させたことで現在の1年生でその指導を必要とする生徒はいない。

② ディクテーションテスト



「ジョリーフォニックスの基本の42文字（綴り）の音」は、7つのグループで構成されている。各グループの学習終了後、生徒一人一人の定着度を確認するために、生徒が自分で文字を書くディクテーションテストを行った。教師が、単語を普通のスピードで2回、一つ一つの音で区切って2回、普通のスピードで1回の順に発音し、生徒はテスト用紙に自分で単語を書いた。音や形、使い分けが難しいと思われるものを意図

的に8語出題した。4線上に文字を正しく書くことができるか、音を文字にできるか、音を正しく聞き分けられるか、大文字と小文字の区別ができるか、同じ音で違う文字（例：「c」「k」「ck」）が正しく使い分けられるかなど個人の状況を把握し、その後の支援に生かした。何ができないかと同時に、何ができるようになったかも分かるので、個人の成長を伝えられることもでき、自信をもたせたり英語学習への意欲を高めたりすることにも役に立った。

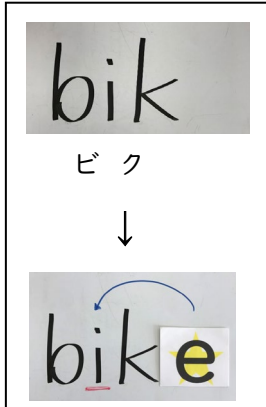
(4) 同音異綴りの学習

「同音異綴り」とは、同じ音を基本の42文字（綴り）と異なるスペルで表すものである。「ジョリーフォニックス基本の42文字（綴り）の音」の学習後に、教科書を取り扱う前に学習しておけば単語の読みや書きの助けになると思われるもの6つの同音異綴りの学習を行った。その他の同音異綴りは、教科書の学習が始まり新出語句の学習の時などに適宜取り扱った。

① 「基本の4文字（綴り）の音」の学習後に取り上げた同音異綴り

ア 「ee」の同音異綴り「y」	イ 「ee」の同音異綴り「ea」
ウ 「ai」の同音異綴り「ay」	エ 「oi」の同音異綴り「oy」
オ 「ie」の同音異綴り「y」	カ 「母音+子音+e」（魔法使いのe）

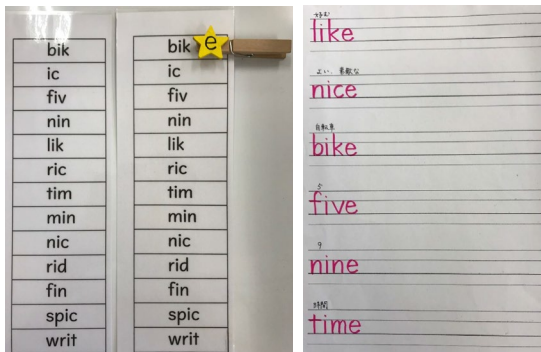
② 「母音（a,i,u,e,o）+子音+e」（魔法使いのe）の学習の流れ



【魔法使いのeがない読み方とある読み方の違い】

「母音（a,i,u,e,o）+子音+e」となると、この「e」の存在で母音は長母音（名前読み）になる。このeを「魔法使いのe」や「マジックe」と言う。この法則の学習を以下のように行った。

- ア 「e」のつかない状態の単語を示し、音ボタンを置いてブレンドしながら発音の確認をする。
- イ 「魔法使いのe」の法則を説明し、単語に「e」を付けて、ブレンドしながら読みの確認と練習をする。
- ウ 各ペアに、語が書いてあるカードと星にeを書いた木製ピンチを配付し、ペアで練習する。
- エ 教師は2分ほど全体の様子を見て、必要なペアと一緒に練習をするなどの支援をする。
- オ 全ペアの所に行き、1人2語ずつ発音させて、1人1人が正しく発音ができるかを確認する。
- カ 全員の発音を確認した後、単語を書く練習のワークシートを



配付し、「丁寧に書くこと」と「フィンガースペース」を意識させながら単語を書かせる。

【左：語が書いてあるカードと木製ピンチ】
【右：ワークシート】

3 ジョリーフォニックスの学習と並行して行った、新文型や教科書本文内容を意識した学習

(1) アクションカード（教科書付録）を使用した活動



アクションカードは、教科書の巻末資料の絵カードで、片面にはイラストが、その反対側にはその動詞句が英語で書かれている36枚のカードである。非常に基本的な動詞句が扱われており、新文型の学習過程の中でアクションカードを使ってパターンプラクティスを行うことも多いため、毎年絵を見てその表現を声に出せるようにしてきた。今年度も、最初はイラストの面を見せてそれぞれの表現にアクションを決めて口頭練習させる活動を繰り返した。スムーズに言えるようになってからは、I やYouなどの主語のある肯定文、否定文、疑問文等を声に出す練習をした。導入はアクションカードの番号順に行ったが、その後は英語表現科の授業内容と関連させながら、「英語の授業で使用できる表現」や「一日の生活についての表現」などとカテゴリーを決めて、練習を重ねた。

(2) 教科書で扱われる内容を意識した話す活動

新文型や教科書本文の学習が始まってからも、スムーズにそれらの学習内容が定着できることを意識し、英語の教科書「My Project I 自分のことを話そう」という單元までに出てくる表現や文法事項をピックアップし、英語表現科の授業内容を構成した。「友達と質問し合おう」「友達と好きなものを尋ね合おう」「毎日や週末することを尋ね合おう」「自分のことを紹介しよう」というトピックでは、英語を読んだり書いたりする活動は一切せずに、イラストを多用し話す表現活動を重ねた。英語科の授業でも、教科書を取り扱う学習に入ってもスムーズな理解につながるよう、フォニックス学習の合間に、復習として短い時間でそれらの話す活動を意図的に行った。

4 負荷を感じさせることなく書く力の定着を図ることを目指した家庭学習課題

本校では、国社数理英の教科は週末課題を出すことが共通実践の一つとなっている。フォニックスを学習している間は、学習した法則で読んだり書いたりできるものしか課題には出すことができない。そこで、「音の学習をして、読めるそして書ける文字や単語を写すまたは書く」ことを基本とした課題とした。楽しみながら書く活動に取り組めるようにイラストを多用し、負荷を感じることなく書く力を定着させることを目指した。

(1) 課題の内容とその目的

① 週末課題1-2は、学習した文字を4線上に正しく書くもので、学習した文字を正しく4線上に書くことができるようになることを目的とした。

② 週末課題1-3は、イラストを表す英語を語群から選び4線上に書くもので、イラストを英語で何と言うかが分かり、その音と文字を結び付けることができるようになることと、学習した文字を正しく4線上に書くことができるようになることを目的とした。

③ 週末課題1-4は、英単語の意味を語群から選ぶもので、文字を見て音にすることができ、日本語でどのような意味になるのかが分かることを目的とした。

④ 週末課題2-2は、アクションカードのイラストを見て、空欄に入る英語を語群から選ぶ、また

5月1日(月)提出 英語科週末課題

1. 自分の名前を丁寧に書きなさい。

2. 高さに気を付けて、下の小文字を4線上に書きなさい。

s	a	t	i	p	n	c
k	e	h	r	m	d	

3. 左ページのイラストを表す英語を下の語群から選び、4線上に書きなさい。

can	cap	carrot	cat	desk	hand
hat	pen	ten	tennis	test	upside down

4. 英語の意味を下の語群から選びなさい。

①an ()	②ask ()	③drink ()
④kick ()	⑤pat ()	⑥pink ()
⑦red ()	⑧sick ()	⑨sit ()

赤、赤い 蹴る 座る 尋ねる 1人の、1つの
病気の 飲む ピンク ベット

5. 自分が必要だと思う英語を練習しなさい。

5月28日(月)提出 英語科週末課題

1. 自分の名前を丁寧に書きなさい。

2. 絵を見て、空欄に入る英語を(1)から(8)までは語群から選び、その他は自分の力で書きなさい。

(1) Say () () . (2) Take a () .
(3) () () me. (4) () dinner.
(5) () your camera.
(6) Clean your () . (7) Close your () .
(8) () a () . (9) Live () Hokkaido.
(10) () () your pencil.
(11) () a movie. (12) () you () the station.
(13) () some tea. (14) () your friend.

at	bath	book	good	room	song
morning	Bring	Cook	Look	Sing	

3. 空欄に「i」か「r」のどちらかを入れて単語を完成させなさい。

(1)赤、赤い (2)春 (3)授業 (4)部、クラブ (5)動物
(6)牛乳 (7)~から、~出身の (8)走る (9)長い (10)昼食
(11)緑、緑の (12)跳る

(1) red (2) sp (3) ing (4) c (5) ass
(6) c (7) ub (8) animal (9) mi (10) k

は自分の力で書く内容で、アクションカードのイラストを英語で何と表現するかが分かり、その音と文字を結び付けることができるようになることと、学習した文字を正しく4線上に書くことができるようになることを目的とした。

⑤ 週末課題2-3は、「a」と「u」や「l」と「r」、「c」「k」「ck」など使い分けの難しいものに焦点を当て空欄に入れる内容で、それぞれの文字の正しい音や同じ音の使い分けが分かり、日常的に音の違いを意識して聞きとろうとしたり正しい発音をしようとして、正しく単語を書くことができるようになることを目的とした。

5 「ジョリーフォニックス」の学習に関するアンケートの実施と結果

(1) 今年度7月に実施した「ジョリーフォニックス」の各活動に関するアンケート結果

① 「ジョリーフォニックス」のそれぞれの活動への感想を教えてください。

活動内容	楽しかった・好きだった	役に立ったと感じる
お話	94%	90%
アクション	87%	93%
音の聞き取り	82%	97%
ブレンディング	79%	99%
ディクテーション	93%	99%
歌	78%	64%

(2) 今年度12月に実施した「ジョリーフォニックス」の学習に関するアンケート結果

① 「音とつづりの関係の学習は、現在あなたが英語を学習しているうえで役に立っていますか。」

とても役に立っている	54%
ある程度役に立っている	42%
あまり役に立っていない	4%
全く役に立っていない	0%

② どんな時に役に立っていると思いますか。(自由記述)

- 初めて見る単語や読み方が分からない単語を声に出して読むとき。(25)
- 英単語や英文を書くとき。(16)
- 本や店、看板、テレビなどに書いてある英語が読めるようになったとき。(9)
- 聞いてスペルを予想したり書いたりすることができるとき。(7)
- テストを受けているとき。(7)
- 音の似ている単語や綴りが似ている単語の違いが分かるとき(6)
- 先生が英語で話しているときやリスニングの活動のとき。(3)
- 英語らしい発音をしようとしているとき。(3)
- まとまった英文を読むとき。(2)
- 単語を覚えやすいと感じるとき。(3)
- 見直しをする時に音のルールを思い出すと、間違いを見つけやすいから。

VIII 研究の成果と課題

I 成果

- 生徒へのアンケートの結果から、年度当初の「ジョリーフォニックス」の学習は現在の英語学習にも役に立っていることや、「話す」「聞く」「読む」「書く」各分野で生徒の負担を軽くしていることが分かった。「ジョリーフォニックス」で出てこない音と文字の関係についても、どうしたらより負担をかけることなく生徒に覚えさせられるかを考え

て指導するようになった。

- 「ジョリーフォニックス」と並行して、新文型や教科書本文内容と関連した学習を意図的に行ったり家庭学習の課題を工夫したりしたことで、フォニックスの学習から教科書を使う学習にスムーズにつなげることができ、現在は進度においての問題もない。
- 8月実施の地区実力テスト及び11月実施の県英テストは、本校の生徒は地区および県平均を上回る結果であった。県英テストにおいては、大問全てにおいて地区および県の平均を上回る結果となった。単語を何と読めばいいのかが分からずに答えられない生徒や、答えは分かっているにもかかわらず正しい綴りで書くことができずに正答とならない生徒をこれまで多く見てきた。英語学習の初期段階に「ジョリーフォニックス」を実践し音と文字の関係を学ばせたことで、大きな負担を感じずに単語を読めたり正しい綴りで書いたりできる生徒が増え、英語が分かる、できるという自信をもたせることができた。その結果、一人一人の生徒が意欲的に英語学習に取り組み、平均を上回るテスト結果につながったと確信している。

2 課題

- 今年度は、フォニックス学習の書く活動のワークシートに教科書に出てくる単語を取り上げることで、教科書との関連を図ることができた。他の活動においてもフォニックス学習と教科書とのつながりを図る部分があると思われるため、それを追究してさらに効率的な学習にしていく必要がある。
- 書かれている英語の発音はできても、それを書くとなると困難さが出てくる生徒が予想以上に多かった。それは、英語で何と表現するのかが分からないのかもしれないし、英語で何と表現するかは分かるが文字が浮かばないのかもしれない。生徒一人一人がどこでつまづいているのか、書くことができない要因を把握し、一人一人に応じた適切な支援を考えていく必要がある。

《参考文献》

「はじめてのジョリーフォニックスーティーチャーズブックー」

(編著者：ジョリーラーニング社 監訳者：山下桂世子 出版社：東京書籍)